

「社会性の起原—ホミニゼーションをめぐって」

2020 年度第 1 回共同研究課題研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2020 年 6 月 27 日（土） 13:00～19:00

2020 年 6 月 28 日（日） 10:00～12:45

場所： オンライン会議

報告者：

1) 松本卓也（地球環境研）

霊長類学が問い直す、「障害」とは何か

2) 曾我亨（AA 研共同研究員・弘前大）

牧畜民の紛争にみる社会性

3) 杉山祐子（AA 研共同研究員・弘前大）

一石二鳥の在来知一焼畑農耕民ベンバの事例から

3. 内容（要旨および質疑応答・議論）

3-1) 霊長類学が問い直す、「障害」とは何か（松本卓也）

要旨：

本発表では、重度の身体的損傷があると考えられる野生チンパンジーの新生児についての事例報告を行った。そしてヒトの障害を対象とした研究のレビューを行い、ヒト以外の霊長類種において「障害」をどのように捉えられるかについて検討した。

発表者を含む Mahale Mountains Chimpanzee Research Project (MMCRP) の研究者は、タンザニア連合共和国・マハレ山塊国立公園の M 集団において、重度の身体的損傷があると考えられるチンパンジーの新生児（以後、XT11 と呼ぶ）を発見し、継続的に観察した。XT11 の外見的な特徴として、胸部にこぶ（おそらく腫瘍）があり、左手に 6 本の指（おそらく 1 本は浮遊指）があった。また、同月に生まれた個体の発達過程と比較した際の特徴と

して、XT は 22 月齢時においても母乳以外の食物を口にする場面が観察されず、また四肢を使って自力で移動することがなかった。XT11 の母親は自分の子を非血縁者に比較的好く預ける「放任主義」の母親として知られていたが、XT11 の子育ての際には血縁者（XT11 の姉と兄）以外が XT11 に触れることはなかった。XT11 はおよそ 22 月齢時に消失したが、消失の原因は不明であった。

XT11 と血縁者とのやりとりには、これまでに同様の観察例がほとんどあるいは全くないものがいくつか認められた。まず、母親の毛づくろいや採食時に XT11 は地面に寝かされていることがあった。また、母親が XT11 の姉に XT11 を積極的に預けていると思われる場面が観察された。そうしたやりとりは淀みのないものであり、日常的に繰り返されている可能性が示唆された。一方で、同集団の個体が XT11 を特に怖がったり攻撃したりといった特異な行動を示すことはなかった。具体的には、オトナオスが母親への毛づくろい中にちらりと胸の中の XT11 を見る、あるいは同年代の子が XT11 の周囲で地面を転がって遊ぶ、といった場面が観察された。

ヒトの障害を捉える代表的な枠組みとして、個人モデル（損傷モデル・医療モデル）と社会モデルが挙げられる。個人モデルにおいて、障害は個人の医療やリハビリテーションの問題と捉えられ、健常と対置されたものとして位置づけられる。障害の原因を損傷（心理学的・生理学的・解剖学的な構造または機能の欠損ないし異常）に帰着させるという点で、本質主義的と言える。一方、社会モデルは、身体的損傷を持つ人々に「障害を負わせる（disable）」のは社会であるとし、障害とは、社会への完全参加から不必要に隔離・排除されることを通じて押しつけられるものであるとする考え方である。障害者が経験する問題は、医療で治せない身体的欠損や機能の低下そのもの（損傷）ではなく、障害者の生活を困難にするような社会の問題であるとする点で、構築主義的と言える。

特に野外環境でのヒト以外の霊長類を対象とした研究においては、外見上の損傷によって「障害」を定義することが多い。つまり、ヒトを対象とした研究における個人モデルに近い考え方で「障害」が扱われる傾向がある。しかしながら、社会モデルが批判したように、身体的な損傷をそのまま「障害」と捉えることは、「障害」の特別視に繋がり、「障害」を持つものは社会参加が不可能になって当然とする価値観をヒト以外の動物に押し付けることになってしまう。

本発表では、前述した XT11 と他個体とのやりとりが、これまで同様のやりとりがほとんどあるいは全く観察されていないという意味で（少なくとも観察者には）一見「変」ではあるものの、やりとりには淀みがなく、周囲の個体からの特別な攻撃などの反応がないことを紹介した。つまり、XT11 の損傷が顕在化するようなぎこちなさは、チンパンジー間のやりとりにおいてはほとんど見られなかった。その背景には、やりとりが繰り返されることによってぎこちなさが解消されていくこと、同集団の個体が「変」なやりとりに対しても特別視しないことなどが示唆される。本発表では、チンパンジー同士の「変」だが淀みのないやり

りの詳細に着目することで、これまで身体的な損傷に帰着すると考えざるを得なかった「障害」にまつわるやりとりの多様性を（損傷が顕在化しないことも含めて）明らかにできることを強調した。今後の展望として、本発表で示したようなやりとりは、昨今の障害社会学が重要視する（ヒトの）障害者の日常的実践・エスノメソドロギー的方法による知見と、方法論を共有するものとして比較可能であると思われる。一旦の結論としてはあまりにも当たり前だが、今後も個体同士のやりとりの詳細な記述・分析の積み重ねが必要である。

質疑応答と主な議論：

<論文プレスリリース時のメディア側の報道表現について>

- 論文内の「ケア・世話・血縁者」という言葉がメディアにより「介護・保護・家族」といったヒトに卑近な表現へと置き換えられていた
- プレスリリース時の研究者側の発言・意図
 - ・ プレスリリース時の研究者の発言に「弱者」などのコメントが含まれており、それらが「介護・保護」などを連想させたのでは
 - ・ ヒトの障害者へのケアや「介護」と結びつける意図が著者にあったのではないか
→プレスリリース後、ヒトの社会における「介護・保護」の背景にあるものはなにかを考えるようになった
- 血縁個体の表現方法と受けとられ方
 - ・ 血縁関係にある個体を表現する際に、発表者が「お兄ちゃん、お姉ちゃん」という言葉を使用しており、サル社会に「家族」を想定しているように感じた
 - ・ “Biological mother”を 日本語の「母」という言葉に落とした時点で家族を連想させる
 - ・ 霊長類学において「家族」に基準はあるか
→チンパンジー研究において「家族」という用語は一般に使用しない

<「障害」として語ることにについて>

- 論文内のチンパンジー（XT11）を「障害児」と名づけてよいのか？
 - ・ 過去に報告されたダウン症様のチンパンジーの症例に酷似
 - ・ チンパンジーの社会に、人間社会で語られるノーマリティ（正常性）のようなものは存在するか
→今回は「ケア」により逸脱から普通（ぎこちなくないやりとり）になる点に着目
 - ・ チンパンジーの社会に「障害者」は存在するか。ヒトと比較可能な現象を拾えているか
- 「ぎこちなさ」や「変なやりとり」から「障害」を捉え得るか？
 - ・ 「変なやりとり」とは、統計的に珍しいやりとりのことか、質的なものか？
→損傷に結びつく「ぎこちなさ・変なやりとり」を今回は分析

- ・ 「障害」に遡ることなく、社会行為に関わるハンディキャップ性の指標を示してほしい。それをある種の逸脱とみるか、ありうるべき行動変異の範囲内とみるかは、次のことでは
- ・ 「ぎこちなさ」の観察を積み重ねた先に、ある種の「ぎこちなさ」の類型の出現が特定の身体的変異と関連づけられる場合に、それらに対する援助を「ケア」と呼ぶことは可能ではないか
- ・ 現在の分析では、発表者が「変である」と思う個体が「障害者」となる可能
- ヒトにおける「障害」とチンパンジーにおける「障害」
- ・ ヒトの「障害」は、周りとの接続が滑らかな場合、周囲の人から「障害」は見えなくなるが、隠されている部分がある
- ・ ヒトにおいて「障害」を社会モデルなどで問い直す動きには、倫理的な動機が存在する一方で、「障害」の問い直しは、チンパンジーにおいて必要か
→今回はチンパンジー同士の相互行為について検討、将来的にヒトとの比較となれば

<今後の「障害・ケア」研究の展望>

- 「障害・ケア」研究の視点
- ・ 「ケア」が成り立つようなチンパンジーの生物としての特性と、そこで行われる可能性のある他個体の援助とはどのようなものか
例：(1)自力で吸乳不可能な場合の補助 (2)自力で移動不可能な場合の運搬 (3)自力で食物獲得不可能な場合の食物分配
- ・ 「ケア」について繁殖適応度に関連する変異を検討してみてもは。ヒトでは、社会的介入により身体的に不利であっても繁殖可能
- [障害・ケア]の分析方法
- ・ 相互行為に操作的な定義をし、分析した後、ヒトの社会における「障害者」への対応と比較するという流れの方がわかりやすかったのでは
- ・ 「障害」に関し、対面的な相互行為によって成り立つ「対等性」を軸に考えてみては(例：XT11 の周囲で遊ぶアカンボウの事例)
- ・ 「ケア」を行為の接続の問題と捉え、どれだけ広く行為に接続可能か/不可能かを軸に分析することにより、サルとヒトを比較できるのでは

3-2) 牧畜民の紛争にみる社会性（曾我亨）

要旨：

東アフリカの乾燥帯では、牧畜民の民族紛争が頻繁に起きている。従来、こうした牧畜民の紛争は、生態環境に依存した紛争と見なされてきたが、近年は、むしろ土地（土地に付随

する国家予算)の奪取を目指したものや、選挙の得票を目指したものとして理解されるようになってきた (Schlee 2011)。私自身も、国内政策や政治家の扇動が紛争の背後にあることを指摘し続けてきた (曾我 2011, Soga 2009 等)。

ところが、これらの議論と並行して、アフリカにおける紛争の原因を、降雨や気候変動等による水資源量の変化と関連づける議論が活発になってきた。例えば、経済学者エドワード・ミゲル等 (2004) は、アフリカ全域における降雨変動と紛争頻度の相関を指摘しているし、開発経済学者ジェフリー・サックス (2009) も、次のように述べている。「アフリカで起きている紛争の場所や時期などを考察する上で、降雨に関する変数と政治的変数 (民主主義、民族の違い、宗教の分裂、植民地の遺産など) の影響力を比較したところ、降雨の方が政治的変数よりずっと大きな意味があった (p.184)」。降雨変動が紛争に関係していること自体は、古くから指摘されてきたが、アフリカの紛争解決には「政治的問題の解決よりも水問題を解決するほうが有効」という開発目標が、エビデンスに基づいて議論されるようになってきたのである。

これらの議論と連動して、人類学でも気候変動とリスクについての議論が活発に行われるようになってきた。北ケニアの乾燥帯では、地理学者 Witsenburg 等 (2009) や環境人類学者 Ember 等 (2012) が、降雨変動と紛争の関係について調査を進めている。

まず、Witsenburg 等 (2009) は北ケニアのマルサビット地域で調査を行った。マルサビット測候所の気象データと、マルサビット県の公安委員会の記録を元に紛争事件の件数と死者数を調べた。すると、降雨量が少ない年よりも、多い年の方が紛争は多かった。また、平均的な降雨量の年よりも、旱魃の翌年の方が紛争は少なかった。つまり降雨が少ない方が紛争は少なかったのである。ただしマルサビット測候所は山頂にあるため、牧畜民が暮らす低地の降雨量とは必ずしも関連していないという問題がある。

一方、Ember 等 (2012) は北ケニアのトゥルカナ地域で調査を行った。熱帯降雨観測衛星 (TRMM) の観測データを元にした降雨量の推測値と、メディア記事のデータベース (レクシスネクシス) から入手した紛争データを用いて、両者の関係を調べた。すると、雨季の死亡者数は乾季の死亡者数よりも少ないことが判明した。また雨季の直前の月の死亡者数も乾季の月の死亡者数と同じであった。ただし、メディア記事に載った紛争は、比較的大きな事件に限られており、小規模の紛争を見逃している危険性がある。

両者の調査地は、北ケニアのトゥルカナ湖をはさんで東側 (マルサビット地域) と西側 (トゥルカナ地域) であり、やや西側が降雨量が多いものの、自然環境はかなり似通っている。それにもかかわらず真逆の結果がでており、牧畜社会の紛争と降雨量の関係は不明なままとなっている。

これらの結果を踏まえて、本発表は、南エチオピアの牧畜社会における紛争と降雨量の関係を調べた。降雨量については米国海洋大気庁が運用する ARC2 の推定データを用いた。ARC2 を活用することで、Witsenburg 等 (2009) の研究が抱えていた測候所の地理的問題 (高地湿潤帯のデータを低地乾燥帯のデータと見なす問題) を克服できる。ただし、ARC2 の推

定値は実測値と良く一致していると評価されるものの、乾燥帯においては湿潤帯よりも精度が劣るとの報告がある（Novella 等 2013）ことには留意する必要がある。一方、紛争については、2011 年 5 月～2019 年 8 月にかけて現地協力者が記録したものを用いた。メディアが報道する事件と比べると、はるかに小規模な紛争まで扱うことが可能になる。予備的な分析として、Ember 等（2012）に倣い、雨季と乾季の月ごとの平均死傷者数を求めた。

分析の結果、大規模な紛争（5 人以上の死傷者）については、小雨季（10・11 月）が一番多く、次いで乾季（12-2 月、6-8 月）、最後に大雨季（3-5 月）に分かれた。一方、小規模な紛争（5 人未満の死傷者）については、どの季節もほぼ同じ死傷者数であった。今後、詳細な分析が必要ではあるものの、降雨との関連は見いだせなかった。

一方、2011 年から 2019 年までを時系列で並べて見ると、2017 年頃から急激に紛争件数と死傷者数が増えていることが示唆された。この時期は、エチオピア国内で民族に基盤をおいた政治的主張が活発化した時期と重なる。2016 年には、オロモ民族への抑圧に反対する動きが各地で生じ、2018 年に大統領が交代した後は、反政府政党が合法化されたことにより、さまざまな政治的主張が活発に行われるようになった。今後は、南エチオピアの牧畜社会にこうした政治的主張がどのように影響していたかも視野に入れて分析を進める必要がある。

参考文献

- Ember, C., Teferi, A. A., Skoggard, I., and E.C. Jones (2012) Livestock Raiding and Rainfall Variability in Northwestern Kenya. *Civil Wars*, Vol.14, No.2: 159-181.
- Miguel, E., Satyanath, S., and E. Sergenti (2004) Economic Shocks and Civil Conflict: An Instrumental Variables Approach. *Journal of Political Economy*, Vol. 112, No. 4: 725-753.
- Novella, N., and W.M. Thiaw (2013) African Rainfall Climatology Version 2 for Famine Early Warning System. *Journal of Applied Meteorology and Climatology*, Vol.52:588-606.
- ジェフリー・サックス（2009）『地球全体を幸福にする経済学』野中邦子訳、早川書房。
- Schlee, G., (2011) Territorializing ethnicity: The imposition of a model of statehood on pastoralists in northern Kenya and southern Ethiopia. *Ethnic and Racial Studies* 36(5):857-874
- Soga, T., (2009) Sharing System of the “Scarce Resources” in Southern Ethiopia. Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele (eds), In *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*. Trondheim. 357-367.
- 曾我亨（2011）「国家に抗する拠点としての生業—牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井健編『生業と生産の社会的布置』昭和堂, pp.389-426.
- Witsenburg, K. and Adano R. (2009) Of rain and raids. Violent livestock raiding in northern Kenya. *Civil Wars*, Vol.3, No.4: 514-538.

質疑応答と主な議論：

<牧畜民（ガブラ）について>

- ・ ガブラは専業牧畜民なのか
→肉と穀物の交換があり、専業牧畜民とは言えない
- ・ 降水と紛争の関連について、ガブラに災因論はあるのか
→災因論はない
→雨が降ると家畜が増え、雨が降らないと乾燥して家畜が減ることから、降水量が重要であるのは間違いない

<州境と集団間紛争の関係>

- ・ 州境はどのように決められているのか
→かつては地形によって州境が決められていたが、民族境界（行政権）に基づいた州境が設定され、生態的な関係はない
- ・ 州境は政治活動や選挙と関係があるか
→選挙の結果よりも、その土地が自分たちの民族の土地となることにメリットがある
- ・ 食物や配偶相手数などの資源をめぐる紛争がチンパンジーでは見られる
→牧畜民は（井戸などの）希少資源をめぐる争うことはない

<データの分析方法>

- ・ 異なるタイムスパンやエリア区分でデータを分析して、それぞれの結果を比較してみるのがよい
- ・ 降水量だけでなく人口密度を考慮する必要があるだろう
- ・ 一般化線形モデル（GLMM）のような多変量解析も分析の助けとなる
- ・ 生態学的な検討をするなら、農作物の生産高や牛の数等を考慮してみる必要がある
- ・ 紛争の種類（要因や規模、レイディングか否か等）毎に分けて分析してみる、月別降水量を基準として月ごとの乾季/雨季の区分ではなく実際の降水量で分析してみる、などの工夫が必要だと思われる
- ・ 降水量よりも、雨が降らない期間がどれだけ連続するのが重要ではないか
→「1 回の大乾季は耐えられるが、大乾季が 2 回連続すると大変」という語りもあり、関係してくる問題だと思われる
- ・ 直接的な生態的要因だけでなく、紛争自体の季節性みたいなものはないのか
→およそ 20 年以内に大きな紛争が起きていて、何かしらのリズムはあるかもしれない

<降水量と紛争の因果関係>

- ・ 今回のような分析から、降水量の影響が見られたとして、その因果関係が不明確である
- ・ ①降水量が、②果実や食物の生産量に影響し、③資源の不足による紛争の頻発、といった多層的なカスケードやその因果関係が知りたい

- 基本的には家畜をめぐって紛争が起きている
- 降水による地表水の有無がレイディングとかかわっている（e.g. 地表水がなければ家畜を連れて長い距離を移動することができない）

＜グローバルな視点とローカルな視点の比較＞

- ・ 地球規模とか長期的なタイムスケールなど、巨視的な視点では降水量と紛争に関連がありそう
- ・ 2010 年あたりはグローバルにみて、紛争が多かったのではないか
- ・ 紛争頻度のグローバルな傾向とローカルな傾向で関連するのか
- ・ グローバルな傾向とローカルな傾向の違いが分かれば、社会性や進化の話につながるのではないか

3-3) 一石二鳥の在来知―焼畑農耕民ベンバの事例から（杉山祐子）

要旨：

1. はじめに

本報告では、ザンビア北部州に住む焼畑農耕民ベンバの在来農法、チテメネ・システムとそれに関わる在来知を切り口に、個人が技術や知識をわがものとする過程に注目することをおして、それがどのようにして集合的な「技術」となるのか、その過程で他者とともにいることがどんな意味をもつのかを検討する。またその作業を通して、村という（居住）集団を社会性という観点から再検討する可能性をさぐる。

2. 調査概要

ベンバはザンビア北部州¹に住むバントゥー系の焼畑農耕民である。かつて伝統的な王国を形成したベンバは中央集権的な政治システムをもつが、居住集団としての村は母系親族を核とする 10～70 世帯からなり、妻方居住制をとる。この地域にはミオンボと総称されるマメ科の樹種を中心とする疎開林（以下、「ミオンボ林」と記載）がひろがるが、植生がまばらで土地がやせており、農耕に適した土地とはいえない。この環境に適応し、100 年以上の年月をかけて発達してきたのがチテメネ・システムとよばれる焼畑農法である。

チテメネ・システムは、開墾方法と輪作体系に特徴がある。開墾時、男性が木にのぼって枝葉だけを伐採し、枝葉が乾燥すると女性がそれを伐採地の中央に運搬して枝葉の堆積を作る。この堆積部分だけに火入れをして耕地が造成される。この開墾方法は不足する有機物を補い、作物が利用しやすい形の養分を生み出すだけでなく、害虫や雑草の駆除にも効果を示す。開墾後、数年間の輪作がおこなわれ休閑に入る。休閑地に再生する二次林は、多様な野生動植物の住処となり、狩猟・採集を組み合わせた生業活動をとおして人びとの食に豊かなバラエティを提供する。枝葉

¹ 調査開始当時。2011 年から北部州とムチンガ州に分かれた。

堆積の外側は火がかからないので、伐採された枝の切り口から新しい芽吹きが始まり、ミオンボ林の更新が促される。再生した木々は切り口から複数の枝を伸ばして葉を茂らせ、剪定をほどこしたかのように樹上伐採がしやすい樹形となる。開墾する区画を移動させながらチテメネ・システムを継続することによって、独特の樹形に特徴づけられるベンバランド特有のミオンボ林の景観がうみだされる。

3. できるようになるとわかること

樹上伐採と枝葉運搬は複数の作業工程に分かれる。個人はそれぞれの工程をひとりで担えるようになるまで実践を重ねるが、その間に自分の身体的特徴、作業に必要な身体技法、木の樹種ごとの特徴、風向や風力との兼ね合いなど、身体と環境にかかわる多様な知識をまとめて獲得する。同時にひとつの工程が次の工程につながっていること、次の工程を他者が担うことに気づき、次の工程への接続が重要であることを知る。

これがもっとも顕著なのは、樹上伐採に続くクサンクラとよばれる枝葉の整形作業である。この作業のよしあしによって、女性が担う枝葉運搬の作業のしやすさは大きく異なるから、女性たちからていねいな整形作業を強く求められることを、男性は身をもって知る。さらに、樹上伐採やクサンクラ作業のていねいさが「美しい仕事」とよばれ、男性の「一人前」や男性としての器量が評価されることにも気づく。作業それ自体はそれぞれの村びとが1人で進めるのだが、実践する過程を通じてその作業が次の工程に接続していると実感すること、次の作業にどう接続するかが重要だと知ることが、作業それ自体ができるようになることと同時に獲得される知の核心をなしている。それは当該作業をするときにも次の工程を担う他者への「社会的配慮」につながり、さらに「仕事はどう評価されるか」という社会的な視野のひろがりをもうみだす。

4. 多数が樹上伐採に方向づけられる要素と「はずれ」を許容する範囲

村の子どもたちは男女の別なく、野生果実の採集や薪の手伝いをおとして斧使いを身につけるが、男子は 10 歳頃から男性の仕事である樹上伐採を意識するようになり、15、6 歳までに一人で樹上伐採ができるようになる。その後、家族のチテメネ伐採を担う少年もいれば、樹上伐採に熱心でない少年もいる。青年期に入り結婚を間近にすると、男性としての器量が評価されることを意識して多くの青年が樹上伐採に励み、婚資労働を終える 30～35 歳まで熱心に樹上伐採をおこなうが、男性の態度にも幅ができる。

ライフコースの変化によって、男性の樹上伐採への熱意は変動するし、木のぼりができない都市からの移住者やチテメネ以外の農法を試そうとする「変わった人」もいる。村全体としてみると、樹上伐採に励む数人の男性が中核的働きをして他の世帯や伐採練習中の少年たちの後始末などを担い、村全体のチテメネ開墾を支えてきたことがわかる。つまり、ライフコースの特定の段階で「美しい仕事」とよばれる樹上伐採の理想型に近づく努力が必要とされることが、個々の男性を樹上伐採へと方向づけ、集散的技術としてチテメネ・システムを成立させてきたともいえる。

多数の男性の作業を樹上伐採に方向づける要素として、①作業の理想型である「美しい仕事」

がもつ強力なイメージ：作業の理想型が「一人前」の標や男としての器量を測られるという強力な別の文脈とセットになった社会的評価に直結している、②社会的評価に関わる他者のまなざし（見る一見られること）、③作業工程の接続を前提とする他者への配慮、「理想型」ができるようになった者だけが納得できる「作業効率の良さ」、などがあげられる。なかでも、年下からの尊敬のまなざし、同年代・同性からのまなざし、異性からのまなざし、年長者からのまなざしなど、異なる他者のまなざしをもつ力に注目しておきたい。樹上伐採をはじめとするチテメネ開墾作業が、具体的な形として残って他者に見えてしまう作業であることも見逃せない要素である。

「美しい仕事」の理想型が明確である一方、それをはずれた仕事を許容する範囲はひろい。整形作業がへたでできの悪い枝葉でも、運搬する女性たちの文句を飲み込みながら、運ばれ堆積され火入れされて耕地となる。伐採する男性の技術レベルややる気のちがいは織り込みずみだともいえる。その背景には「ひとはずっと同じ状態ではない」という考えかたがある。少年たちは成長するうち伐採ができるようになり、結婚を控えてやる気を増す青年たち、気を抜いてマイペースに回帰するか逆に熱心になる壮年男性たち・・・個人の性格や家族との関係によってもちがいは大きい。「できない・しない・変わっている」人びとも「そういう人」として許容され、変わっていることを責められたりはしない。

5. おわりに

ベンバのチテメネ農法に関わる技術を見ると個人差があるのはあたりまえで、技術の習得や導入、錬成には個人の裁量が強く働く。そこには「できない・しない・変わっている」人が一定数いることも折り込みずみである。樹上伐採の理想型に近づくような特定の方向づけには、「美しい仕事」に結びつけられた社会的評価と他者からのまなざしの強い力がはたらくが、はずれには厳しくない形で技術の「標準形」が集合的に再生産される。そこでの技術は結果的に集合的になるが、集団として「標準形」にむけた教育がされるわけではない。他者は個人に特定の技術を教え込む存在ではなく、まなざしを通じた社会的な力をおよぼす存在としてあらわれる。

このような態度の根底にある「他者」の認識は、「自律するひと」であり、当事者自身がなんとかすることを基軸に村の生活が成り立っていることを示唆する。モノの不均衡には敏感なベンバの村びとであるが、集団全体の利益、「集団」が前面に出される場面が少ない。「集合財」とよべるような財もほとんどなく²、それゆえ「フリーライダー問題」もあらわれにくいようにみえる。自律した個々人がおりなす村の日常は、複数性のイメージを帯びている。この日常が呪いやウィッチハンティングに端を発する排除と暴力にも容易に転換することにも目をむけ、今後検討すべき課題としたい。

引用文献

柳川洋一 1985 「フリーライダー問題の多面的検討-M・オルソン『集合的行為の論理』を手がかりとして」、『ソシオロジ』30:2,pp.1-26

²柳川洋一 (1985)

Shigeta, Masayoshi and Morie Kaneko 2017. “ZAIRAI CHI (Local Knowledge) as the Manners of Co-Existence: Encounters between the Aari Farmers in South- western Ethiopia and the ‘Other’”, in Gebre Yntiso et al. (eds.), *African Virtues in the Pursuit of Conviviality: Exploring Local Solutions in Light of Global Prescriptions*, pp. 311–38.

Oyama, S. 2005. Ecological Knowledge of Site Selection and Tree-cutting Methods of Bemba Shifting Cultivators in Northern Zambia. *Tropics* 14(4): 309–321.

質疑応答と主な議論：

<チテメネの技術習得の年齢やその過程>

- ・ 樹上伐採の技術を習得するのは何歳くらいからなのか
 - 個々人のペースがあるが、15 歳くらいで自分のチテメネをやってみて、16~17 歳くらいから 20 歳くらいで一人前になるというのが一般的
- ・ 母方の叔父など、他者が技術を教えることはあるのか
 - 言葉で教えることが全くないわけではない
 - 自分がやっている近くでやりやすそうな場所を見つけてやらせる、ほっとく、困っているときは黙って手本を見せる
 - 社会全体で人を見て知識の多くが伝承される
 - うまくできることは、子供たちにとって父親に対する敬意のまなざしになるし、女性からの評価にもつながる、他の男子からも「見られている」という意識は強い
- ・ 妻方居住の社会において、自村で評価を得ることにはどのような影響があるのか？
 - 他人に配慮（社会的配慮）ができると評価されることが、年長者からの支援につながったり、村を訪れた人などを通してポピュラリティが作られたりする
- ・ 樹上伐採ができない人は、どう評価されるのか
 - 樹上伐採ができなくても、そういう人として扱われ、許容される
 - 成形・運搬作業ができれば、社会的配慮ができる人と判断され、総合的な評価につながる
 - 樹上伐採できない人のために共同労働をするが、個人の利益（食べていくためではなく、お金を得ようとする行為等）のために労働を依頼することは認められない

<技術の伝達・文化進化論>

- ・ 正統的周辺参加（LPP）はみられるのか
 - 到達すべきところが提示されるわけでも、みんながそれを目指すわけではないし、下手だからといって非難されることもない
- ・ 文化進化論とよく合致する内容であり、技術革新や美しさに関するトレンドの変化、理想形とされる技術はあるのか
 - 美しさに対するトレンドの変化はあるが、その人のやることを認める個別多発性がベースにある

→技術の多様性、柔軟な対応を可能にしているのだろう

<共同作業・共有財とフリーライダー問題>

- ・ 協働作業や協力行動を議論する際にフリーライダーが問題となるが、チテメネにおいてはどうか？
- ・ 存在そのものがフリーライダー問題の原初的な部分であり、技術の有無（できる/できない）ではなく、その場に参加していること自体が大事ではないか（いない、ということが可能な状態だから、いることに意味がある）

→集合財と呼べるようなものがなく、フリーライダーが問題となる場面は少ない

- ・ 「公共財」はその場に一緒にいることが抽象的に表れたものではないだろうか
- ・ 換金性はあまりないが、景観、人間把握、受容につながる人間関係も共有財として考えられないか

→共通する景観イメージはある

→チテメネは財として形を成していないが、共有財は社会性を考えていくうえで重要

→チテメネは、見える状態になっていることが大事であるが、見える状態になっていないものについても考えていくという展開もありえるかもしれない